

# 琉球大学学術リポジトリ

次世代型キャリア教育のデザインに向けたアクティブラーニングの開発と評価：  
起業家育成プログラムからの知見

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大角, 玉樹, Osumi, Tamaki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002008368">https://doi.org/10.24564/0002008368</a>

# 次世代型キャリア教育のデザインに向けたアクティブラーニングの開発と評価 ～起業家育成プログラムからの知見～

大 角 玉 樹

## (要旨)

本稿の目的は、起業家プログラムの観察から得られた知見を参考に、実効性の高い先進的なアクティブラーニング・プログラムを開発・実践し、次世代型キャリア教育モデルをデザインするための基本的なアイデアを整理することである。それらを基盤としながら、将来的には、「レジリエンス（強靱さ、失敗から立ち直る力）」と創造力の醸成に有効な起業家育成プログラムの成果と「文脈的な教授・学習（CTL: Contextual Teaching & Learning）」の理念を取り入れ、専門教育とキャリア教育の一体化を図ることにより、21世紀型能力とされる「生きる力」、「イノベーションを創出する力」を自然に修得できる、科学的根拠に基づいた次世代型キャリア教育（キャリア教育3.0）の構築と検証、及び標準化を試みたいと考えている。

本学においても、平成25年度より、琉球大学産学官連携推進機構及び起業コンサルタントと連携して開設した共通科目「ベンチャー起業入門」が、本年度3年目を迎えた。第一期の受講生から学生起業が二件生まれるという成果はあったものの、同科目履修を前提とした「ベンチャー起業実践」を継続受講する学生が非常に少ないことが課題の一つになっている。また、特別な予算がなくても、持続可能な講義にするための協議を行った結果、平成27年度は、世界的に展開されている起業体験イベントである、“Startup Weekend”と連携した、産学官民連携型の講義デザインとなった。

本稿では、本年度の講義デザインとプロセス、アンケート結果を振り返り、21世紀型能力の修得を促進する次世代型キャリア教育モデル、すなわちキャリア教育3.0を構築していくためのヒントを探りたい。Startup Weekendは、洗練された起業家育成プログラムであり、まさに能動的なアクティブラーニングであるだけでなく、短期間に、一生忘れられない学びを体験するディープ・ラーニングの要素も含まれている。これを契機に、専門科目とキャリア教育の一元化を図り、アクティブラーニングという講義形態だけではなく、講義の質の深化につながるディープ・アクティブラーニングの先進的なプログラム開発も試みたい。

# 次世代型キャリア教育のデザインに向けたアクティブラーニングの開発と評価 ～起業家育成プログラムからの知見～

大角玉樹

## I. 序

本稿の目的は、起業家プログラムの観察から得られた知見を参考に、実効性の高い先進的なアクティブラーニング・プログラムを開発・実践し、次世代型キャリア教育モデルをデザインするための基本的なアイデアを整理することである。将来的には、それらを基盤としながら、「レジリエンス（強靭さ、失敗から立ち直る力）」と創造力の醸成に有効な起業家育成プログラムの成果と「文脈的な教授・学習（CTL: Contextual Teaching & Learning）」<sup>(注1)</sup>の理念を取り入れ、専門教育とキャリア教育の一体化を図ることにより、21世紀型能力とされる「生きる力」、「イノベーションを創出する力」を自然に修得できる、科学的根拠に基づいた次世代型キャリア教育（キャリア教育3.0）の構築と検証、及び標準化を試みたいと考えている。

筆者は、文部科学省就業力GP事業（推進責任者）、産業界ニーズGP事業、及び本学の中期目標達成経費事業において、アクティブラーニングを基盤とする沖縄型キャリア開発プログラムの開発・検証を行ってきた。また、沖縄県の起業家人材育成事業と連携して、産学官民協働による起業家育成プログラムを実施・検証している。これまでの関係者との議論において、(a)学部専門教育とキャリア教育の乖離、(b)高次のアクティブラーニングの企画運営の困難性、及び、(c)起業家教育とキャリア教育の一元化、の三つが喫緊の課題として指摘された。

(a)については、学習内容をリアルな生活と関連付けてアカデミックな学習への動機づけを高めるCTLや、教科学習と学生のキャリア目標に関連する分野での就業体験を融合する「コーオプ教育」<sup>(注2)</sup>に関する調査研究を進めることが有用であろう。(b)については、アクティブラーニングの手法を体系化・標準化し、大学や地域の特性に応じて、無理なく実施可能な講義デザインと支援体制の構築につながる調査研究が必要となる。(c)については、例えば、世界で広く実施されている国際標準の起業体験プログラム、Startup Weekendを教育学、行動科学、心理学、経営学、統計学、脳科学等の複合的視点から分析・評価し、効果を明らかにした上で、キャリア教育に収斂していく方向性が考えられる。これにより、生涯に渡る深い学び＝Deep Learningの科学的解明にもつながるだろう。

起業家教育とキャリア教育とは共通する部分が多く、例えば、本学の起業家育成プログラムを併用した普天間高校の取組みは、平成26年度の優秀キャリア教育事例として全国表彰された。<sup>(注3)</sup>内容を概観したところ、能動的かつ質の高い、「ディープ・アクティブラーニング」の構成要素の多くを含んでいるプログラムと推察される。

一方で、起業家教育は、「起業するための教育、ベンチャーを起こすための教育」と勘違いされていることが多く、経済産業省による政策的な推進にも関わらず、教育機関での普及は、

キャリア教育ほどではなさそうである。キャリア教育と言いながら、内容は起業家プログラムを実施していることさえある。英語の“entrepreneur”や“entrepreneurship”が、それぞれ「起業家」、「起業家精神」と翻訳されてしまったがために、いまだに誤解や偏見が多いようである。あくまでも、起業家教育は、起業家的なモノの見方や考え方、行動特性、すなわち起業家精神を修得するための経済教育であり、その延長線上に、実際の起業やベンチャーがあることを教育関係者に理解して頂くことが難しいようである。

このような状況の中、平成 25 年度より、琉球大学産学官連携推進機構及び起業コンサルタントと連携して開設した共通科目「ベンチャー起業入門」が、本年度 3 年目を迎えた。第一期の受講生から学生起業が二件生まれるという成果はあったものの、同科目履修を前提とした「ベンチャー起業実践」も継続受講する学生が非常に少ないことが課題の一つになっている。また、特別な予算がなくても、持続可能な講義にするための協議を行った結果、平成 27 年度は、世界的に展開されている起業体験イベントである、“Startup Weekend”と連携した、産学官民連携型の講義デザインとなった。

本稿では、本年度の講義デザインとプロセス、アンケート結果を振り返り、21 世紀型能力の修得を促進する次世代型キャリア教育モデル、すなわちキャリア教育 3.0 を構築していくためのヒントを探りたい。Startup Weekend は、洗練された起業家育成プログラムであり、まさに能動的なアクティブラーニングであるだけでなく、短期間に、一生忘れられない学びを体験するディープ・ラーニングの要素も含まれている。今後、専門科目とキャリア教育の一元化を図り、アクティブラーニングという講義形態だけではなく、講義の質の深化につながるディープ・アクティブラーニングの先進的なプログラム開発も試みたい。

## Ⅱ . 大学教育改革とキャリア教育<sup>(注4)</sup>

### ① 大学教育改革とアクティブラーニング<sup>(注5)</sup>

大学教育改革の一環として、アクティブラーニングの導入が推奨されている。平成 26 年度文部科学省事業「大学教育再生加速プログラム」においてもアクティブラーニングがテーマの一つとして掲げられ、46 件 47 大学が採択されている。<sup>(注6)</sup> 筆者も、同プログラムの公募説明会に参加したが、求められる内容が高度であり、とりわけ、特定の教員だけが取り組むのではなく、全学的な取組みであることが条件となっていたため応募を見送った。従来の GP 事業とは異なり、学長のリーダーシップが求められる全学的な取組みであり、本学の現状を鑑みると断念せざるを得ないプログラムであった。

しかしながら、就業力 GP、産業界ニーズ GP、及び琉球大学中期目標達成経費事業を通じて、全学的な先導モデルの開発を目的に、様々な形態のアクティブラーニングに取り組んできたことから、現在も高度化に向けた努力を続けている。参考までに、中期目標達成経費事業での取組み内容は表 1 に整理した通りである。

表1. 中期目標達成経費事業

事業年度	事業名	概要
平成20年度	先進的キャリア支援体制の構築事業	教育改革の一環として、全学的なキャリア支援体制の先導モデルを展開し、結果として平成22年度文部科学省大学生の就業力育成支援事業に採択された。
平成22年度	会計・金融を中核とした観光・経営人材育成支援事業	沖縄で不足している会計・金融分野の人材育成を目標とした教材開発と実務家によるセミナー・講義を行うとともに、WebClassを活用したe-learning開発に着手した。
平成23年度	e-learningを活用した観光・経営人材育成支援事業	観光・経営に焦点をあてた、理論・実践一体型プログラムの開発と実践を行い、観光分野の高付加価値化とサービス・イノベーション創出を目的としたe-learningの開発と改善を行った。
平成24年度	学士力(URGCC)と就業力の相乗効果を目指したキャリア形成支援事業	琉球大学の定める学士力、就業力、及び学科の提供する専門科目群の整合性を図り、学修課程の中で着実にキャリア形成ができるよう、支援体制を整えた。社会が必要とするコンピテンシーと汎用スキルが一元的に修得できるアクティブラーニングも開始。
平成25年度	e-learning等の情報リテラシーを活用した、学生の就業力向上と起業家マインド育成を目指した人材育成支援事業	e-learning教材のバージョンアップを行うとともに、反転授業の試行を含む講義内容の改善を行った。全学的なアクティブラーニング展開の先導モデルとして、起業家と連携した「ベンチャー起業講座」(共通科目)を開設。
平成26年度	学生の自立的・自律的な学びを支援するための環境整備事業	従来 of 取組みを活かし、「自ら考えて行動する」学生育成支援の環境整備を行った。ICT及び学習環境の整備、キャリア教育3.0を目標としたディープ・アクティブラーニングの試行、高度職業人育成支援体制の強化を行った。
平成27年度	グローバル化に対応した次世代型サービス・プロフェッショナル人材育成事業	就業力GP及び産業界GPの成果を基に、喫緊の課題であるグローバル人材の育成プログラムの開発に着手し、沖縄県に求められているサービス分野に特化した実践的教育プログラムを試行。アクティブラーニングの高度化にも取り組んでいる。

表1からもわかるように、平成24年度からアクティブラーニングの開発、実施、体系化に取り組んでいる。とりわけ一生忘れられない深い学びと体験の修得については、筆者が所属する産業経営学科の特性を活かした「ベンチャー起業講座」において実施し、ディープ・アクティブラーニングの先導モデルとなっている。また、起業家育成プログラムとキャリア教育の一元化を図ろうとしていることが特色の一つとなっている。今後は、この取組みを、教育学、行動科学、心理学、経営学、政策科学、脳科学等の複合的視点から評価・分析を行い、科学的根拠に基づいたプログラムを開発していく予定である。

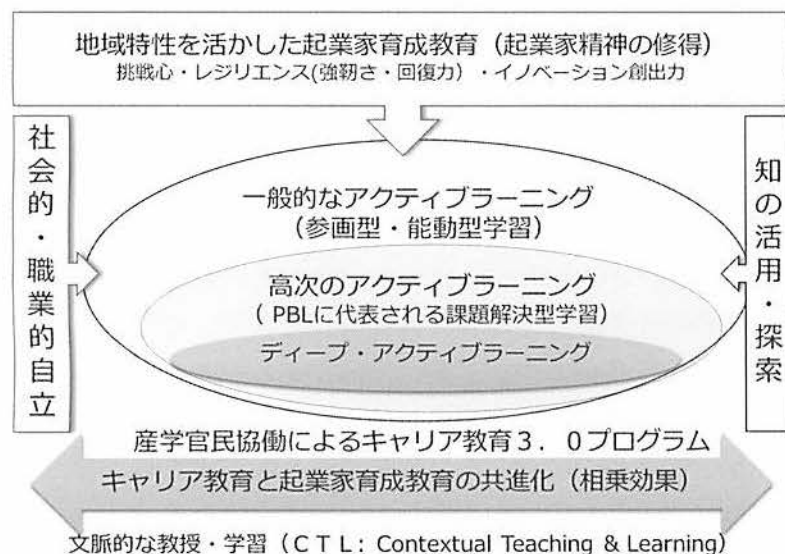
## ② 次世代型キャリア教育～キャリア教育3.0～

筆者は、キャリア教育を、主に就職活動支援を目的としたキャリア教育1.0、社会的・職業的自立のための汎用スキルの修得を目的としたキャリア教育2.0、と区別している。実際には、学部本来の専門教育が疎かになり、過度にキャリア教育1.0に偏っていることや単にキャリアという名称を冠しただけの実体のない科目の増大から、「キャリア教育汚染」と批判したこともある。<sup>(注7)</sup>

今後目指すべき方向性としては、21世紀型能力の修得を目指した、質の保証されたアクティブラーニングの展開が考えられる。また、現在のキャリア教育が産業界ニーズに偏っており、1970年代に、アメリカの国立教育研究所が提唱した、学校を中核とするキャリア教育、家庭・地域社会を中核としたキャリア教育、家族を中核とするキャリア教育が欠落している。<sup>(注8)</sup> 雇用主の観点からの産業界寄りのキャリア教育（エンプロイヤビリティの修得）＝就職活動支援が主体となっている現状では、研究者が中心の大学教員の理解を得るのは難しいのではないかと考えられる。

知の活用能力を高めるアクティブラーニングを基盤として、アメリカ国立教育研究所が提唱したように、より幅広く、また現実を反映したライフキャリア、ライフコースを包摂した教育モデルを仮にキャリア教育3.0とし、次世代型キャリア教育のイメージを整理したものが図1である。

図1. 次世代型キャリア教育のイメージ(筆者作成)



序でも触れたとおり、これまでのキャリア教育、起業家育成教育の課題として、(a)学部専門教育とキャリア教育が乖離し、狭い意味でのキャリア教育偏重になりつつある現状、(b)高次のアクティブラーニング企画運営の困難性や教員の理解不足、及び、(c)挑戦心、レジリエンス、創造性を育む起業家育成教育との融合が指摘されている。

(a)については、アカデミッ

クな教科学習への動機付けのために、学習内容をリアルな生活と関連付けるCTLや、教科学習と学生のキャリア目標に関連する分野での就業体験を融合する「コーオプ教育」に関する実践例を参考にしつつ、学部専門教育との一元化を図りたい。

(b)については、誰にでも容易に導入できる一般的なアクティブラーニング、PBLに代表される高次のアクティブラーニングを体系化し、標準化するとともに、個々の教員の負担を軽減するために、産学官民の連携がとりやすい支援体制を構築することで対応できそうである。とりわけ、本稿で紹介するStartup Weekendは、産学官民の多様なオーガナイザーやファシリテーターが存在しており、急速に全国展開していることから、PBLの一環として連携するプログラムとして検討しても良いのではないだろうか。

(c)については、従来のキャリア教育と起業家育成教育の特性を比較検討し、別々のプログラムとして実施するのではなく、両者の相乗効果が得られるようなプログラムを開発、実践、検証を行いたい。省庁や提唱機関によって、キャリア教育と起業家教育に対する概念や手法が徒に混乱していることから、例えば、『起業家教育導入実践の手引き』（2007年）では、これらの整理を試みており、大いに参考になるだろう。また、起業家プログラムの効果の検証を、教育学、行動科学、心理学、経営学、政策科学、脳科学等から複合的に行うことにより、経験に頼りがちであったプログラムの科学的根拠を明らかにすることができるだろう。

### Ⅲ．平成27年度起業家育成プログラムの評価

平成27年度の「ベンチャー起業入門」は、過去二回の実践結果を踏まえて、世界標準ともいえる起業体験イベント、Startup Weekendと連携して行った。本講義は、実際の起業ではなく、「起業家精神」の修得を目的としており、リーンスタートアップの手法を採用していたことから、同じ理念と手法で実施されている、Startup Weekend Okinawaと協働することとなった。また、同プログラムには、学生だけではなく、多様な社会人が参加することから、21世紀型能力の修得に適していると考えられる。

#### ① 参加学生に対するアンケート結果

今回は、70名の定員で募集し、結果として、学生32名、社会人等34名の参加となった。本稿では、講義の一環として参加した本学学生32名のアンケートを分析する。アンケートは、後日、個別のインタビューも行うため、記名式とした。

表2から表10までが、今回の主な質問項目を整理したものである。男女別では男性24名、女性8名で、参加前にStartup Weekendを知っていた学生はわずか5名であった。産業経営学科の提供科目ということもあり、同学科の学生が最も多いが、共通科目なので、全学部、全学年の学生が受講していた。受講理由として最も多いのが、「起業に関心がある」25名で、次いで、「役に立ちそうだから」、「オリエンテーションを聞いて」、がそれぞれ10名であった。昨年度、厳しいオリエンテーションを行った結果、受講生が激減した反省を踏まえ、本年度は、できるだけモチベーションと関心を高めるように工夫したことが影響しているようである。

表には掲載していないが、今回のプログラムは、いきなり本番を迎えると混乱する可能性が



あることから、事前に三回のイベント（土曜日開催）を実施している。シラバスには、三回のうち最低2回は参加するように指示しており、結果として、一回目が25名、二回目と三回目は24名の参加で、比較的高い出席率であった。

この講義の目的と Startup Weekend の目的は、起業することではなく（もちろん将来起業することも前提であるが）、起業家精神（entrepreneurship）の醸成、起業家の育成にある。起業家精神というのは一般的に、起業家のモノの見方や考え方（マインドセット）と行動特性の両方を含むと考えられている。今回受講して、起業家精神を身につける講義内容だったと思いますか？という問いには、「強くそう思う」22名、「そう思う」9名を合わせると31名であり、ほぼ講義目的を達成する回答であった。（表6）

修得できるスキルを示すために、社会人基礎力に関する資料を紹介したうえで、「最近、大学教育の中で社会人基礎力を修得する事が推奨されるようになっていきます。今回の講義で身につける事ができると思われる社会人基礎力を5点満点で評価して下さい。」という質問の回答が表7である。学生にとっては、社会人基礎力という用語は初めてのようであったが、主観的ではあるものの、おおむね全ての社会人基礎力と講義で修得可能な能力と関連性が強いと感じたようである。これに関連して、講義前に比べて、大きくなったと感じる社会人基礎力を複数回答で答えてもらったところ、上位は、「実行力」「創造力」がそれぞれ19名、「主体性」が18名であった。

講義の満足度については、「非常に満足」25名、「満足」5名、「どちらかといえば満足」3名と、全員とまではいかないが、概ね満足度の高い講義であった。不満、未回答の学生を個別にチェックしたところ、未回答は、講義のメールのチェックを怠り、結果として本番に参加できなかった学生3名であり、不満と回答したのは、講義内容そのものではなく、参加者のモチベーションが非常に高く、雰囲気圧倒されたことによるものであった。起業家的な資質や行動に合わない性格の学生だったかもしれない。

この講義を他の学生に薦めるかという問いには、「絶対薦める」20名、「薦める」9名と大半が肯定的であった。「絶対に薦めない」と回答した1名は、上述の不満と回答した学生である。

表2. 男女別

男女別	人数	割合
男	24	75%
女	8	25%

表3. 学年

	人数
1年	7
2年	14
3年	8
4年	3

表4. 受講生の所属学部・学科

学部・学科	人数
観光産業科学部産業経営学科	11
観光産業科学部観光科学科	5
医学部医学科	1
理学部数理科学科	2
理学部物質地球科学科	2
工学部情報工学科	2
工学部環境建設工学科	4
法文学部総合社会システム学科	3
法文学部人間科学科	1
農学部亜熱帯地域農学科	1



表5. 受講理由 (複数回答)

受講理由	人数	割合
起業に関心があった	25	78.1%
役に立ちそうだから	10	32.0%
オリエンテーションを聞いて	10	32.0%
楽そうだから	8	25.0%
シラバスを読んで	6	18.8%
集中講義で行われるから	5	15.6%
友人が受講するから	4	12.5%

表6. 起業家精神の修得

	人数	割合
強くそう思う	22	68.8%
そう思う	9	29.1%
どちらともいえない	1	3.1%
あまりそう思わない	0	0%
全くそう思わない	0	0%

表7. 社会人基礎力との関係 (5点満点)

社会人基礎力	5点	4点	3点	2点	1点
主体性	18	12	2	0	0
働きかけ力	20	9	2	1	0
実行力	22	9	0	1	0
課題発見力	23	6	3	0	0
計画力	17	10	3	1	0
創造力	20	9	2	1	0
発信力	13	15	2	2	0
傾聴力	17	9	5	1	0
柔軟性	15	10	7	0	0
状況把握力	16	8	7	1	0
規律性	13	8	7	4	0
ストレスコントロール力	9	7	12	4	0

表 8. 身についた社会人基礎力(複数回答)

社会人基礎力	人数
実行力	19
創造力	19
主体性	18
計画力	16
課題発見力	16
状況把握力	15

表 9. 講義の満足度

満足度	人数	割合
非常に満足	20	62.5%
満足	5	15.6%
どちらかといえば満足	3	9.4%
どちらかといえば不満	0	0%
不満	1	3.1%
非常に不満	0	0%
未回答	3	9.4%

表 10. 他の学生に薦めるか？

	人数	割合
強く薦める	20	62.5%
薦める	9	29.1%
どちらともいえない	1	3.1%
薦めない	1	3.1%
絶対に薦めない	1	3.1%

## ② 学生アンケートの自由記述

アンケートでは、自由記述欄に 400 字程度を目安に感想やコメントを記入してもらった。ここでは、回答を原文のまま紹介しておきたい。

回答
<p>起業という一つの働き方を知る事ができた事が一番大きな気づきだと感じました。ただ、ビジコンとかとの差をあまり感じなかったのが、少し残念でした。社会人の方々と意見を交わすきっかけにもなり、自分の足りないところがたくさん見えた事がよかったです。今回は残念ながら負けてしまいましたが、次はもっとアイデアをブラッシュアップし、ビジネスプランをしっかりと組み立てていく事で勝つ事ができればいいと考えています。その結果、起業につながる学びを得られればと思います。</p>
<p>この講義に参加して、最初はすごい緊張して、意見もアイデアも言うことが出来なかったけど、グループワークを中心としたスタイルであったため、段々と発言できるようになった。なので、自分の発信力や積極性が講義を受ける前に比べ、とても高まったと感じる。講義には沢山の社会人やアドバイザーの方がいて、こんなに身近に大人と接して、ディスカッションする機会など全くなかったため、私には考えもつかなかったような意見もあり、沢山の気づきがあった。そのおかげで、新しい考えの着眼点を見つけることができたり、自分と異なる意見も逆に勉強になることが多かった。スタートアップの本番では、思っていた以上に大変でチームワークの大切さを学んだ。ひとりひとりが自分の役割を責任もってやることで、発表は成功に終わることができたし、辛口な意見もあつたりしたが、とても勉強になった。起業する大変さをすべて知ることは出来なかったけれども、実際の起業家さんとの交流もあり、いい経験ができた。改善点としては、プレイベントの時間が短かったため、アイデアを起業につなげるために経営戦略を考えるのがとても大変でした。</p>
<p>人間を 4 つの種類に分けるとする ①やる気があって能力のある人間 ②やる気があって能力のない人間 ③やる気がなくて能力のある人間 ④やる気がなくて能力のない人間 基本的にこの講義に参加する人はおそらく②のタイプの人間が一番多いと思われる。この講義でのみならいいかもしれないが、②のタイプは実社会だと本人だけ空回りして迷惑なことこの上ない。あまりやる気があるのも考えすぎだなと思った。自分の能力を客観的に把握し、それに応じたやる気が必要だなと思った。日本人としては、このような謙虚さが必要だなと思った。</p>
<p>友達に誘われて事前説明会に参加しこの講義の存在を知り、大角先生が「実際に参加してみてください。もし、それが失敗であってもあとあと、笑い話になる。だから、挑戦してください。」という言葉聞いてこの講義に挑戦してみようと思いました。そして、実際に参加してみたらこれまで自分が知らなかった知識を教えてもらい、これまで受けてこなかった体験をしました。また、この体験はここで終わるものではなく次の自分の新たなステップにつなげる知識や体</p>

験になっており、本当にこの講義をうけてよかったと思いました。また、この講義のスタートアップウィークエンドは継続して参加していくことが重要であるので、またこの講義を受講したいと思います。

私はこの講義を通して、起業とは何かを素人なりに考え悩みぬいたと思います。最初の startup weekend に参加した際に同じ大学の先輩が大学生の内に起業をしていて、さらにしっかりとした将来性がある事にとっても驚きました。私と2つ程しか変わらないまだ社会にも出ていない人がここまでの成功を成し遂げるのかと非常に勇気を貰えました。この講義を終えてから私の起業に対する考え方はより一層大きなものになり具体性が高まってきました。またこのような実業家の方と直接会えるような機会はそう多くないと思いますので是非この体験を今後の人生に活かしていきたいと思っています。

第一回のイベントしか参加出来ませんでしたけど、起業ということに対して自分で描いていた想像とは違って、起業とはヤル気と行動力があれば出来る、ということに気づかされました。特に、今大学生で起業している人がいることにビックリしました。その反面その人にあって自分にはないものを気づかされました。私は、口では言えるが行動にするのに少し時間がかかります。でも、その人は自分の信念を貫き行動して起業に成功しているのだと思いました。私は建築士を目指して勉強していますが、将来自分の事務所を持ちたいと思っています。なので、この授業を受けて本当に良かったとおもいます。ありがとうございます。

私は、去年この講義内で行われてた四角さんと大角教授のトークライブを見に行き、大角教授の話や考えにすごく惹かれ、来年はこの講義を取ろう！と決めて、今回講義に参加しました。今回は START UP WEEKEND とのタイアップという形でしたが、イベントを終えての感想は、悔しい気持ちしかありませんでした。私のグループは全員がハスラーということで、全員が意見を推し進めて、チームを統制する人が誰もなくて、方向性のないまま、課題解決に進み、それが間違っているということに気付いた時には期限に間に合わないところまで進めてしまっていました。また、時間配分を行う人もなくてそこもまた反省点でした。起業するには、やはりチーム内での自分の役割を確認することと、バランス本当に重要になることと、時間の意識を持つことを身を以て経験できました。今回、今までの自分では経験できなかった経験をして、自分がいかになににも興味を示さず、考えもせず生きていることに気付くことができました。起業は、どれぐらい身の回りのことに興味を持ち、考えているかがカギとなっているとイベントを通して得ることができたので、意識していきたいです。

私は今回の講義で、初めて意欲あふれる社会人の方々と知り合う事が出来ました。そこで社会人の方々と私の知識量や技能の差を肌で感じる事ができました。 それによって、いままで、講義や話でだけ聞いていた社会が求める「やる気のある人材」や、「発想力や表現力のある人材」といった曖昧なものが、自分の中で具体的な像になった事を感じました。そして、何よりも自分に足りない知識や技能を知る事で、これからの大学の4年間で自分が知っておくべき、やっておくべき事がわかってきた事が、この講義の一番の成長だと私は思います。 あえて改善点を挙げるなら、やはり時間をもっと欲しいと感じたので、以前やっていたという宿泊しながらの startup weekendの方が良いと思います。

3 日間常に思考を続けることは、大学生活では慣れておらず、頭が痛くなるほど辛かったです。しかし、チームで課題解決のために、ディスカッションを続ける過程は、真剣な楽しさがあり最高の体験となりました。今回 Startup weekend の個人的な反省点は、思考を続ける中で解決したい問題がどんどん溢れて、課題がブレてしまったことです。頭の中だけで考えてしまうと、思考が散らかって、同じ思考のサイクルを続けてしまうので、考えたことを常に紙に書き、頭の中で思考のサイクルを続けられないことが必要だと思いました。そして、今回の Startup weekend での 1 番の収穫はイベント後も集まってプレストを続けられる仲間を得たことです。イベント後も課題探求を続けることが大事だと思うので、次回以降の Startup weekend でもイベント後もチームで集まることを強く推奨して欲しいです。ありがとうございました。

自分自身、起業自体に興味はあったが、本を読むことくらいしかせずに特に何かをやってきたわけではなかった。実際最初は他人と一緒に何かすることは億劫であると考えており、登録したけれどもあまり乗り気でなかった。けれども参加していき、いろんな考えと出会ううちにどんどん主体的になっていった。最後の本番の三日間はチームの考えのずれや、ターゲット層が少なく十分なアンケートが取れなかったりといろいろな苦勞は、あったが作りきった後は大きな達成感があり、今思うと充実していたと感じた。やはり自分で主体的に動いて行動しようやく理解できるようなこともあるのでこのような授業をどんどん取り入れてほしいと感じた。大変だけれどとてもためになる授業だった。

学内で行う講義と違い、外部実施なのでワクワク感が違いました。そして、非常の良いストレスが加わるので自発的に動くこと(主体性)が身につくと思う。良いストレスとは、他学部学科の人、学外の人、社会人と触れ、全員のバックグラウンド関係なくフラットな状態で1つのプロジェクトに取り組むことが可能で、かつ初対面でグループを組んで3日後には結果を出さないといけない状態のことです。

【改善点】プレイベントのコメントのところでも述べたが、テーマ設定(All for Okinawa)が創造力の妨げになっているのではないかと感じた。基本的に学生が持っている情報(主体的に活動していない場合)は社会人より少ないであろう(大学生が持っている沖縄の情報、社会人が持っている沖縄の情報の違い)。なので、「沖縄の課題解決」から繋がる創造の枝が少なくなってしまう、窮屈になったのではないと思う。自分が持っている「課題」が沖縄のためになるのか? という障壁を無くすと自由なアイデアが増えると思う。

プレイベントから startup weekend のすべての授業に参加した感想はとても有意義な時間を過ごすことができ、参加してよかったです。プレイベントでは熱意あふれる起業家の話や沖縄の課題解決に取り組んでいる社会人の方の話を聞くことができ、非常に刺激を受け考えさせられることが多々ありました。私が一番講師の方の話で印象に残っている言葉が「成功の反対はまだ成功していない」という言葉です。試験や何か大きなことに取り組むとき、この言葉を思い出しようまくいかなかったり投げ出しそうになったりしても「まだ成功の経過段階だ」と自分に言い聞かせ成功するまで何度でも挑戦しようとおもいました。また、startup weekend では社会人の方とアイデアを考えるなかで様々な意見や考えを聞くことができました。それにより、自分にはないもの(企画の達成に向けた計画の立て方、役割分担の仕方)などを見ることができ、とても勉強になりました。

今回初めてひとつの問題に対して長時間考えてみて正直とても苦しかった。その中でも一番辛かったことは、いける。と思ったサービスが既存していたときだ。そのたびアイデアをいちから練り直す作業を3日間行い頭がパンクしそうになった。結局最終日まで悩んで、発表1時間半前に閃いたアイデアで勝負した。それが意外と悪くなかったのが驚きだった。しかし、多くの人から指摘していただいたので、このイベントが終わったあともグループで考えていきたい。今回参加して苦しいこともあったが、イベントを通して社会人や他学部の人と出会い、交流できてとても楽しいことも多くあった。また機会があれば参加したい。改善点はStartup Weekendのイベントページに本番の日程が初日以外記載されてなく、アルバイトのシフトを調整するときに困ったので、日程を明確にしてほしい。

私はこの授業を大学生で起業した知り合いに薦められて受講しました。第1回のプレイベントから、多くの刺激を受け、いい仲間たちと出会い、今でもなお共に話したりビジネスを計画する程の仲の人もいます。できることならばもっと早くからこの授業を受講したかったと思っています。Startup Weekend本番では、プレイベントとは全く違う、多くが社会人という状況で、特に私はチームの構成が8人中6人が社会人の方という状況でした。チーム内で会議が始まっても何を言っているか理解することが精いっぱい、発言したくてもできませんでした。しかし自分の無能さを実感したり、今後なりたい自分がよりはっきりするようになったりと、非常に濃い時間を過ごせました。今、Startup Weekendで知り合った仲間とビジネスをしています。この経験から私は実行力、意味のある話し合い、アンテナの張り方など多くのことを学びました。参加して本当によかったと思っています。ありがとうございました。

自分のキャリアについて思い悩んでいた時期に参加したので、このイベントに参加したことはとてもいい契機になりました。色んなバックグラウンドを持った方々、起業家はもちろん、公認会計士、社長、ITのエキスパート、教師など色んな人と会話して、自分の視野を広げていくことができたと思います。

前々から起業にとっても興味があり、将来起業を考えていたのですぐに履修することを決めました。三回目のプレイベントで自分のアイデアを発表したのですが、グループワーキングが楽しく、また社会人の方からも自分のアイデアに足りないところをアドバイスしていただき、貴重な体験でした。ビジネスモデルについてここで学んだことはどんなに面白いアイデアでも、「利益がしっかりとでるか」「そのサービスが本当に人の助けになるか(社会問題解決になるか)」「リスクを少なくする方法はあるのか」この三つを一番しっかりさせないと企業が採用したくなるビジネスモデルにはならないことがこの講義を通して学びました。実際に私達チームのアイデアは二つ目と三つ目がしっかりしていなくて優勝はできなかった。これから企業へ自分のアイデアを提案する機会は絶対に出てくるし、何かを提案する際に骨となるポイントを3つおさえて挑みたいと思います。

改善点：本番参加できない生徒がいた。我々、生徒がwebメールをチェックしていないのが悪いですが、本番のイベントを出ないと単位認定されない旨を最初の説明会で伝えてほしかった。もしくはemailで登録させるべきとおもいます。お願いします。

自分は今回講義でStartup Weekendに参加したのですが、講義があると知る以前からStartup Weekedには目的を持つ

て参加するつもりだったので、講義として参加することになってもイベントにはたくさん時間をかけたし、色々な失敗や、学び、いろいろな人との交流・意見交換ができ、満足度はかなり高かったが、ただの講義(単位)として参加した生徒が居るという可能性があってその点の満足度が低いです。そして、他の一般人(社会人の方)から「学生は単位として来ているんだね。」と、苦笑いで言われたことがかなり悔しかった。今回の講義はその講義を受けている時だけではなく、講義後の自分の生活や行動に大きな影響を与える事になったので、参加して本当に良かったです。

人生の中でも貴重な経験で、参加できて良かったと思っています。実際にビジネスとしてスタートしたいということで、イベント後にも連絡をとって進めています。偶々かも知れませんが、これほど情報リテラシーの高いチームで共同作業したことが初めてで、最高に楽しかったです。

私は4月に2年生になり、1年時よりも行動力を高めたい、色々なことにチャレンジしたいと思い大角先生の講義内容説明を聴いて、今回のベンチャー企業入門を受講しました。プレイメントには2回参加したのですが、両方とも途中で抜けないといけなくて、グループワークには参加できませんでした。なので正直本番を迎えることが恐かったです。そして7月3日の本番を迎えました。そこでたくさんの社会人がいることに驚きました。結果的に私が所属したチームは全員大学生のチームで“ごみ箱Wi-Fi”を作りたいといったものでした。しかし結局それはうまくいかず話すごみ箱としてプレゼンしました。優勝はできませんでしたが、とても楽しかったです。改善点なのですが、せっかく社会人と1から同じものを創る機会があるので、チーム分けで社会人と学生が必ず一緒になれたらいいなと思いました。私たちのチームには社会人がいなかったため、結局は実際に社会で働いている人の生の意見を聴けなかった、なので社会人と学生を混合にしたチーム分けがあつたらいいなと思いました。そうすれば、学生の人脈も広がるので。

今回、この講義に参加して感じたことは、自分に熱が足りないということでした。StartUp Weekendでは、専門の実習に時間を割いていたこともあり、自分の案を練ることができず、1分間ピッチを発表できませんでした。結局、自分の思う良いチームに参加しましたが、発表を通して支持されたものに、発表していない自分が声を上げて修正をかけたり、引っ張って行ったりすることができず、イベント中もその後も悔しく思っていました。しかし、このような経験をする中で、自分の意見をを通して思いきりやっていくことが、一番楽しいことではないかと思うようになりました。この経験を活かし、これから先のグループワークで活かしていきたいと思います。



### ③ 「ベンチャー起業入門」の評価と課題

講義全体終了後、7月22日に開催場所でもあった宜野湾 Gwave のインキュベーション・ルームで、担当者及びオーガナイザーによる反省会と、ビデオ・エスノグラフィーによる分析を行った。ここでは、その概要を整理しておきたい。

#### (総合的な観点)

- (a) ベンチャー起業入門の目的は、起業することそのものではなく、起業家精神の醸成や起業家的資質をもった人材の育成であり、Startup Weekend の目的・手法と一致する。また、講義設計の基本となっているのが、世界中で展開されているリーンスタートアップであり、今後も連携により、起業家育成プログラムの精緻化と普及を図ることは、大学にとっても、地域社会にとっても有用である。
- (b) 実際の起業に関する教育も必要ではあるが、ベンチャー起業入門は、全学部・全学年の学生が受講できる共通科目として開設されていることから、まずは、起業家的なものの見方や考え方を身に付けてもらい、起業の知識やノウハウなどは、別の科目や外部セミナー等を紹介することで対応することが望ましい。目的は、あくまでも起業家精神の醸成であることを再確認した。
- (c) 後期開講予定の「ベンチャー起業実践」は、2月13日開催の沖縄学生ビジネスプラン・コンテストへのエントリーと参加、及びリポートで単位認定する方向で、さらに検討を続ける。
- (d) 後期の集中講義「ベンチャー・ビジネス論」(専門科目)で、事業計画の作成、産学官連携推進機構の実施する講演会・セミナー、実習を採用する方向で協議を進める。可能であれば、電子商取引をはじめとした低いリスク、元手が少額で可能なライト・スタートアップの演習を取り入れた講義設計を行いたい。

#### (良かった点)

- (a) ベンチャー起業入門と Startup Weekend の目的が一致しており、アカデミズムと実践的活動の融合を無理なく実現できる。
- (b) 短期間の間に、多くの起業家、実務家と交流することができることから、社会人基礎力(ジェネリック・スキル)の醸成が可能である。
- (c) 過去2年の経験上、大学単独ではメンター役をそろえるのが困難であるが、Startup Weekend と協働することにより、この問題が解決される。
- (d) 宜野湾 Gwave のインキュベーション・ルームで開催したことから、場所の雰囲気、機器類等、学習環境が優れており、本学の教室で行うよりは学生のモチベーションが上がる。
- (e) これまでの経済産業省の報告書で指摘されている、起業家教育における「リアリティ不足」という課題が大幅に改善できる。
- (f) 短期インターンシップの代わりに、ないしは、キャリア教育の一環として採用しても十分効果的なプログラムである。あるいは、大学には、インターンシップや就活前の効果的な対策

セミナーとしてアピールしても良いかもしれない。

- (g) 学生だけの講義の場合は、慣れ合いになる、あるいは思い込みだけになる可能性があり、経験豊富な社会人が参加することにより、それを回避できる。
- (h) 過去二年開催した、週一回の15回講義よりも、今回のような短期集中の方が効果が高いと感じられる。

(課題・改善点等)

- (a) 産学官民、お互いの目的や立場を最大限尊重し合いながら進めることが不可欠であり、この理念をさらに共有しておくことが必要である。
- (b) プログラムの成果は、ファシリテーターの力量に負うところが大きいので、今後、多数育成しておくことが必要である。
- (c) 可能であれば、醸成されるスキルが可視化できるような評価システムを開発することも検討課題である。学生にとっても、社会人にとっても、測定が困難なスキル、能力の修得状況が目に見える形で示すことができれば、モチベーションが向上、継続することが期待できる。
- (d) 運営資金の面から、Startup Weekend を継続的に支援してくれるスポンサーの開拓も不可欠である。
- (e) 単位取得だけを目的として受講する学生への対処も早急に検討しておく必要がある。講義の人気を高め、そのような学生を排除するのも良いが、できるだけ起業教育への最初の入り口として間口を大きくしておくことも重要であり、バランスをとっておきたい。また、単位取得ができなくても、学生が参加したくなるほど魅力的なプログラムになるよう改善していくことも必要である。
- (f) プレイベントの開催は学生にも好評であったが、テーマ設定は再考した方が良い。”All For Okinawa”では世界観が閉じてしまい、ネガティブに受け取られることもある。よりグローバルを意識させるテーマの方が良いのではないだろうか。
- (g) 共通科目ということもあり、最低限必要な専門科目を身に着けていない学生も参加することになったが、CTLの理念を活かし、座学の部分の連携（マーケティングや起業を考えるうえでの基本的な知識、ノウハウ等）も検討課題である。
- (h) 将来的に、大学コンソーシアム沖縄を通じた単位互換により、広く普及させていくことも重要である。
- (i) 県外メディアにも注目されるよう、次回に向けて工夫する。
- (j) 大学の講義や課外セミナーとの連携の在り方の先進モデルとして、効果を明らかにしていくことも必要である。
- (k) 大学教育改革で推奨されているアクティブラーニングとしての意義と効果の科学的根拠を明確にすることにより、キャリア教育との一元化を図ることも将来の方向性として考えられる。

#### Ⅳ．展望と今後の方向性

以上、平成27年度にStartup Weekend Okinawa と連携して実施した「ベンチャー起業入門」

の実施概要とアンケート評価を整理した。

序でも触れた通り、今回の講義のデータと観察から得られた知見を参考に、実効性の高い先進的なアクティブラーニング・プログラムを開発・実践し、次世代型キャリア教育モデルをデザインしていく予定である。今後の研究及び実践の特色は次の通りである。

- (a) 従来、別々に行われてきたキャリア教育と起業家育成教育を融合させ、アクティブラーニングを活用した次世代型キャリア教育（キャリア教育3.0）の構築を目指す。
- (b) CTLの理念を基に、学部専門教育・座学とキャリア教育の一元化を図る。
- (c) 実効性の高いアクティブラーニングが、より多くの教育機関で実施されるように、手法の標準化と評価の可視化を行ない、共有する。
- (d) 就業意識や自己効力感の低い沖縄学生の地域特性を考慮したプログラム開発を試みる。
- (e) 生涯に渡る知識活用能力を修得するディープ・ラーニングとライフキャリアを統合する。
- (f) 経営学、心理学、教育学、行動科学、政策分野や脳科学等との学際的・分野横断的研究を行ない、科学的根拠を蓄積する。
- (g) 観察分析手法として、ビデオ・エスノグラフィー（※集団の行動様式をビデオ観察によって詳細に分析する手法）を用いる他、ビッグデータの分析を産学官協働で多角的に行なう。

これらを着実に展開することにより、学生の学習意欲と社会や職業に対する関心が高まるだろう。また、起業家精神の修得により、従来のキャリア教育よりも、レジリエンス、課題発見・解決能力と創造力も高まるものと予想している。さらに、企画運営が困難なアクティブラーニングの手法の標準化により、積極的に高次の、あるいはディープ・アクティブラーニングに取り組む教員が増加し、結果として、大学教育改革を促進する可能性がある。特に、就業意識や自己効力感の低い沖縄の学生に対して有効なプログラムは、他の都道府県においても高い効果が期待できる。政策的にも、起業家教育とキャリア教育の一元化によって、我が国の地方創生政策で最も必要とされているイノベーションの担い手＝起業家的人材の育成につながるものと考えられる。<sup>(注9)</sup>

今回の Startup Weekend Okinawa の内容を再吟味し、先進的な研究論文のリビューと内外の事例研究を行いながら、科学的根拠に基づき、無理なく自然体で21世紀型能力が修得できる、キャリア教育3.0を確立していきたい。

(脚注)

注1. CTLに関しては、例えば、松本浩司「アメリカのキャリア教育における「文脈的な教授・学習（contextual teaching & learning）」の特質」『カリキュラム研究』第16号、pp.15-18、2007年、同「アメリカの教員養成教育カリキュラムにおける「文脈的な教授・学習」ージョージア大学での開発プロジェクトに注目してー」『カリキュラム研究』第19号、pp.59-70、2010年等が参考になる。

注2. コーオペ教育（Cooperative Education）に関しては、例えば、京都産業大学レポジトリ（<http://hdl.handle.net/10965/993>）所蔵の、田中寧「コーオペ教育の歴史と現状、および、日本における展開とその課題」『高等教育フォーラム』第3号、pp.9-20、2013年が詳しい。コーオペ教育は1906年にハーマン・シュナイダー

によって開始されたとされ、座学と現場における就業体験を融合させた教育制度を意味する。

- 注 3. リクルート進学総研『キャリアガイダンス』（平成 26 年 10 月、vol.404、pp.32-33。）に先進事例の一つとして紹介されている。（[http://souken.shingakunet.com/career\\_g/2014/10/vol404201410-760f.html](http://souken.shingakunet.com/career_g/2014/10/vol404201410-760f.html) でも閲覧可能である。）平成 26 年度の、キャリア教育優良教育委員会、学校及び P T A 団体等の推薦調書については、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/12/\\_icsFiles/afieldfile/2014/12/15/1353755\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/12/_icsFiles/afieldfile/2014/12/15/1353755_02.pdf) を参照。
- 注 4. 本章の内容は、次の文献を参考に、筆者のアイデアを整理したものである。①株式会社浜銀総合研究所『平成 24 年度総合調査研究：キャリア教育の内容の充実と普及に関する調査報告書』2013 年。②三菱 U F J リサーチ&コンサルティング(株)『起業家教育導入実践の手引き』2007 年。③『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』2006 年 1 月。④『「生きる力」を育む起業家教育のススメ』2015 年。⑤文部科学省・国立教育政策研究所『「キャリア教育」資料集』2014 年。⑥「アクティブラーニング」『Kawaijuku Guideline』、pp.44-46、2010 年。⑦「大学のアクティブラーニング」『Kawaijuku Guideline』、pp.27-37、2011 年。⑧河合塾による、「大学の教育力を見る「大学のアクティブラーニング調査」プロジェクト」（<http://www.kawaijuku.jp/research/activelearning/>）、⑨エントウイスル、N. 山口栄一訳『学生の理解を重視する大学授業』2010 年、玉川大学出版部。
- 注 5. 京都大学高等教育研究センターの溝上慎一氏によると、アクティブラーニングは、学習の形態に関わる概念であり、学生参加、協同、協調学習や問題解決等がある。また、ディープラーニングは、学習の質に関わる概念であり、概念を既存の知識や経験と関連付ける深い学習のことである。これらが融合する学習がディープ・アクティブラーニングであり、生涯忘れることのない知識活用能力を、アクティブラーニングで修得する学習スタイルである。「大人数講義における知をふまえたアクティブラーニング型授業（ピアインストラクション）の開発」（河合塾・RIASEC 主催 PROG セミナー配布資料：2012 2012.7.14（土）：[http://www.kawai-juku.ac.jp/prog/event/pdf/2012progosa\\_4.pdf](http://www.kawai-juku.ac.jp/prog/event/pdf/2012progosa_4.pdf)）、溝上慎一「カリキュラム概念の整理とカリキュラムを見る視点—アクティブ・ラーニングの検討に向けて—」『京都大学高等教育研究』第 12 号、pp.153-162、2006 年、中山留美子「アクティブ・ラーナーを育てる能動的学修の推進における PBL 教育の意義と導入の工夫」『21 世紀教育フォーラム』第 8 号、pp.13-21、2013 年、等を参照。
- 注 6. 大学教育再生加速プログラムについては、[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/ap/](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/ap/) を参照。
- 注 7. 拙稿「産学連携教育の新展開～レジリエンスを高める起業家育成教育～」『琉球大学経済研究』第 89 号、pp.25-48 を参照。
- 注 8. 下村英雄「産業界・地域関係団体におけるキャリア教育の取り組み」仙崎武ほか編著『キャリア教育の系譜と展開』2008 年を参照。
- 注 9. 我が国の成長戦略である日本再興戦略改訂 2014 年版では、ベンチャー起業を支える国民的な意識改革のために、起業家教育の充実が掲げられている。例えば、教育機関については、①専門高校での分野の垣根を越えたカリキュラムの編成による起業家育成プログラムを活用した初中等教育からの起業家教育の推進、②大学・大学院の起業家教育講座の教員ネットワーク強化・国際化・シリコンバレーへのベンチャー人材の派遣やトップクラスのベンチャー支援人材ネットワークの形成が挙げられている。<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/honbun2JP.pdf>、pp.33-34 参照。